

元禄六（一六九三）年

（五月二十八日）

廿八日 去ル三月廿七日、米子町大谷ガ船人等竹島ヨリ押テイザナヒ倡イザナヒ歸リ候朝鮮人、近日ノ内ニハ府下ヘ罷越候ニ付、御家中ノ家来末々迄見物ニ出候トモ、猥リニ無之様堅ク可申付候。其内、女童ノ出候コトハ可為無用之旨被仰触。此度、異客ノ内ヘ暴悪ノ者有之由相聞エ候ユエナリ。

（六月四日）

六月大

四日 米子詰加藤郷右衛門・尾関忠兵衛、朝鮮人アンピンシヤトクネキ（東萊ノ人、年四十二歳和語通詞ナリ）・トラヘウル（蔚山ノ人、年三十四歳。始終筆硯ヲ不採ユエ基本字不伝ト云）此両客ヲ相具シ

鳥府ヘ来リ、姑ク本町ノ町会所（二丁目ニ在リ）ヘ御差置ニ相成候ナリ。

案、此度朝鮮人ヲ連来リ候旨趣ハ、近年彼国ノ漁船トモ大谷・村川カ船ヲ竹島ヘ通セザル以

前、先ニ渡海シテ此方ノ漁業ヲ妨ゲヌル故、両家ノ者ハ大ニ及迷惑、前ニモ是ヲ呵禁スト

雖、更ニ許諾ノ色ナク、以後ハ却テ多船ヲ渡シ、弥狼籍ノ挙動相見エ候ニ付、最早無詮方、

押テ異客等ヲ連歸リ、事ノ次第ヲ備ニ上啓シテ、幕府ノ御威断ヲ蒙ンガ為也ト聞エケル。

（六月五日）

五日 辰之助君、朝鮮人御見物ノ為、町会所ヘ被為人。

（六月七日）

七日 先ニ異客護送ノ使節ヲ被命置候山田兵左衛門・平井甚右衛門コト、今日陸路ヲ肥前国長崎ヘ發程ス。外ニ御医師竹間玄碩・御徒五人・輕卒・御小人若干、並、脚力・料理人ヲモ附屬セラ。同晦日彼地ヘ參着シ、御奉行川口撰津守殿ヘ件ノ異客兩人ヲ引渡シ、七月廿五日無恙歸着シケルト云。

元禄九（一六九六）年

（一月二十八日）

正月大

十八日 今度、從幕府米子ノ船長大谷オホヤ・村川ガ漁船ヲ竹島ヘ通ズルコトヲ停止セララル。

案、先年以来、毎年米子表ヨリ船ヲ竹島ヘ遣シ候ヘトモ、夫ヨリ先サキ、朝鮮国ノ漁夫等通船シ

テ、年々船隻セキヲ増シ、吾船ノ帆影ヲ望見スルトキハ海岸へ備ヲ張り、或ハ大銃ヲ轟シ、拒撃ノ躰ヲ示シヌルニ依テ、無ク詮方退船シテ事ノ由ヲ備ニ幕府へ上啓シテ恩評ヲ仰ギ候処、思ノ外此度永ク渡海セルコトヲ禁遏セラレ候間、大谷・村川ハ俄ニ活計ヲ失ヒ、甚当惑ニ及ビ、猶モ出府シテ恩裁ヲ請ヒ候へトモ、遂ニ事不叶シテ止ヌ。元和四年初テ渡海セシヨリ至テ于斯ニ八拾一年也。

### (六月四日)

六月大

四日 伯州赤崎灘へ朝鮮国ノ船着岸ス。先ニ隱岐国ノ代官ヨリ竹島へ渡海セル朝鮮船卅二艘ノ内ヨリ、伯州へ訴訟ノ為、使舶ヲ通ジ候旨注進有之。船ニテ乗組ハ十一人也。当時ハ從幕府隱岐国へ代官ヲ被置タリ。

### (六月六日)

六日 就異舶渡着ニ、御船手山崎主馬へ被命急ギ赤崎表へ發遣セラレ候処、長尾鼻ノ海上ニテ件ノ異国船ニハタト出逢候ニ付、船磯ヨリ挽船數艘ヲ出サセ、青谷へ引戻シ、川口ニ入置、堅ク番船申付ケ、令警守之ヲ。サレトモ訳者ツウジンナケレバ、其来由不分明。然ル間、御儒者辻権之丞ツツケンヲ發遣アリテ、船長安同知、並李進士、外ニ一人ヲ青谷ノ専念寺ニ請ジ及筆談候へトモ、其主意明白セザリシ由。又、幕府へハ早速事由飛檄ヲ以、報告セラレ候也。

### (六月二日)

十二日 青谷へ滞舶セル異客等ヲ今日加路へ来舶セシメテ、東禪寺ヲ姑クノ旅泊トセラル。

### (六月二日)

廿一日 十一人ノ異客等ヲ鳥府へ御迎へニ相成、伝馬九疋ヲ遣サル(安同知・李進士兩人ハ乗興ナリシニヤ)。戸田市右衛門・岡嶋藤兵衛・牧野市良右衛門、途路ヲ衛護シ、本町ノ町会所(其比二丁目ニ在)へ御差置ニ相成リ、裏判御吟味役羽原伝五兵衛へ逗留中地走ヲ被命。然ル所、從幕府異客ヲバソノマ、船中へ差置候様ニトノ御沙汰ノ趣、仄ニ相聞エ候故、俄ニ湖山ノ青嶋へカリヤ飯廠ヲ營ミテ、此所ニ被移置。サテ、異船ヲモ湖中へ挽入、繁置レタレバ、今ニ青島ノ南片ニ唐人船屋ノ名残アルハ、其遺事ナリト聞エタリ。以後從幕府命令セラレ候ニハ、近日対州候ノ家人、並、訳者、其表へ可被差下候間、其上異客へ願ノ趣有之候ハ、肥前国長崎ノ津へ廻船ス可シ、当国イイキ異域ノ事ヲ取扱候所ニ非ル旨ネンゴロ懇ニ開諭シ、無異議承諾致シナバ、其方ノ家人、並宗家ノ役人

ヲ附添、長迄送届可申、若シ亦否ニ及ビナバ、直ニ自国へ帆ヲ開キ候様ニト急度可申渡旨命令セラル。一記ニハ七月帰帆ト載タリ。又此船加路灘ヨリ追放シニ相成ルト見ユ。実ニ然リヤ。此度

ノ異舶ノ落着未詳ニ記セシモノヲ見ズ。又先輩、先ニアンピンシヤガ<sup>キヨ</sup>挙ト両事ヲ一説ニ混合セルモノアリ。看人宜シク取捨ヲ加フベシ。